

奈良、平安時代の小和田

相模川や酒匂川の流域がその人文中心地帯として相武の国といわれ、大化の改新後、相模国に服属し、最初の国府が海老名に置かれたことは、相模国の文化の中心が高座一帯であったことがうかがわれるものである。

従って、足柄峠を下ってきた奈良平安期の旅人は、寒川の渡しを渡ったり、あるいは、その北方の幾筋かの道を往来した。そして平安期に至っては漸時海辺近く、おおよそ現在の東海道に沿って往来されたと見られる。

後一条天皇の治安元年（一〇二一年）、菅原孝標の女が、下総から都に上ったときの紀行文『更科日記』によれば、藤沢の西富から今の東海道に沿って、四つ家、二つ家を過ぎ更に小和田を通じて、茅ヶ崎、平塚、大磯へと海岸近くの道を通ったことが記されており、当地においては、本宿並木付近より今の東海道を北に別れて本宿道祖神を抜け、上正寺、熊野神社裏を経て薬師堂前から菱沼茶屋裏の道祖神から西方の本村に至ったものであろう。菱沼茶屋と本村の間にある一大砂

丘は、当時は存在せず、平坦な直線的道路として往来されていたものと考えられる。

更に、同日記によれば、

「もろこしが原という所も、すなこのいみじふしろきを、二、三日行く。夏は、大和撫子のごくうすく、錦の引き様になん咲きたる……もろこしが原に、やまとなでしも咲けんこそとなん、人々おかしがる」

とあり、もろこしが原は、諸越が原で、朝鮮の高麗の亡命王族が大磯に上陸してからの命名であるが、どこからどこまでを称したのかは定かでない。ただ、二、三日かかるとすれば、藤沢から茅ヶ崎、平塚、大磯、二宮、国府津あたりまでの広範囲の地域であったことが推測されるのである。

かくして、平安末期には、このあたり東西交通の要路となり、国府も大住から余綾へとすべて海岸に接近して南に下ってきたのである。

また、下寺尾に七堂伽藍がらんの建立されたのもこの頃といわれ、これがその後火災にあって本宿の上正寺の前身である顕密兼学の霊場、海圓院として生まれ変わったことは、まことに興味深いものを感じさせる。

先に述べた如く、赤松より発掘された弥生式土器は、この時代の先住民族の使用したものであり、奈良後期から平安末期にかけてこの地に生を営んだものであろう。

これら土器の破片の地表に散見される地帯は、鶴巻、姥神、菱沼一帯にかけての第二期砂丘地

帯及び、上正寺より薬師堂を抜けて本村に通ずる第三期砂丘地帯と、浜竹の第五期砂丘地帯の一部等である。その故に、広範囲にわたってこの時代に聚落を形成していたものと判断される。これら土器破片の散見される地帯は、前記した如く多く「赤マサ」がそのまま地表に露出されており、それはその後において海岸からの砂の吹き埋めにならなかった地帯で、これを赤松における発掘土器について述べることにする。

赤松一帯の地は、隣、辻堂の関東特殊製鋼工場の敷地をも含めて、戦前は大きな赤松林に囲まれた非常に淋しいところで、昭和初期までは狐や狸が住んでいた。古老の伝によれば、その頃すでに土器が発掘されたこともあったが、当時は現在ほどそれ等に関心はなく、放置されてしまったという。

戦時中、軍需工場として園池製作所がこの地一帯を買収して整地したところ、旧松林中学校の西側（注、現在は国家公務員住宅地）近辺に、前記した弥生式土器が発掘されたのである。その際、住居跡と思われるものも発掘され、これ等土器は、住居跡の北側と思われるところにいずれも南から北を向いて倒れた形に発見され、その地層はいずれも「赤マサ」の中であった。

土器の種類は、大小つば（直径30cm以下のもの）、高坏（45cm位のもの）、把手（とって）の多く三十個近くに及んだ。また、住居跡と思われるものは竪穴式と推定され、主柱の杭跡、炉の跡等が見られたが、発掘当時は戦時中のこととて、何等保存の対策もとられず、わずかに発見者、本宿の故程島一郎氏が保管してあったつば一個が、円蔵の郷土史家故鶴田栄太郎氏のもとに保管

されたのである。

いずれにせよ、この時代にはじめてこの地に生を営む先住者の姿を発見することが出来るのであるが、逆にこのことを裏付けするように、当時、同所に池が掘られた際、水田の跡と見られるものが土器の発見と同じくして偶然発見されたことである。掘られた断面に、水田、灌排水溝、あぜ道等と思われるものが現れ出たのである。（前記故程島一郎氏の確認、後図参照）

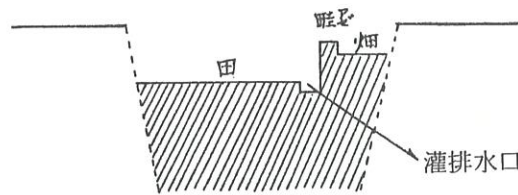
口伝によれば、大正大震災までは、このあたり一帯は、「よし原くぼ」と称され、茅葦生い茂る沼沢地帯であったといわれ、往時、水田の耕作がなされたであろうことが十分うなずけられるのである。大震災によって沼沢地帯は隆起してその面影はうかがうことも出来ないが、この「よし原くぼ」の水は、東海道を北に越えてせん川の川と、逆に南に海に向って大泓（おほい）を抜け海に流れていた。現状は、その後の変遷によって畑となり、往時の姿を偲ぶべくもないが、「よし原くぼ」の通称は今なお残されているのである。

葦は、「あし」とも、「よし」とも読むが、「あし」は、「悪し」に通ずることからそれをきらった忌み言葉が「よし」といわれているが、一般的には「あし」と呼ぶ方が多く、「よし原くぼ」の呼称は例外的なのかも知れない。

ここで、弥生式時代について、その概略を述べることにする。

一般に古代文化は、石器時代、青銅器時代、鉄器時代の三段階を経て発達されたものとされ、石器時代は更に新旧二期に分けられる。わが国では、旧石器時代に人類の住んでいた跡がまだ認

赤松の水田跡断面図



点線は当時掘られた池

裏に浮かび出されてくるのである。そして、千数百年前のすでにこの頃、茅葺生い茂る沼沢と砂丘のみの点在するこの地に生活を求めた先住者に深い敬意を表し、その偉大な労苦を多ししなければならぬと思う。恐らく大天災に見舞われて新砂丘が出現し、遂に住居を捨てて北方に避難せざるを得なくなった胸中を察するとき、その苦難は又筆舌には尽くし難いものがあったと思われるからである。

この大天災を境として平安末期まで、或は鎌倉が世の注目の的となる頃まで、この地には住人は途絶えたものではなからうか。

められないが、新石器時代の文化は、土器の様式によって縄文式と弥生式の二つに分けられ、縄文式文化人はその起原が明らかでないが、非常に長い間全土に分布し、その反面、大陸との交流は殆んどなかったといわれる。この文化の特色は、使用した素焼土器に縄目の紋様を付けたものがあるので、縄文式土器と称される。

その後、おそくとも西暦紀元のはじまる頃までに、北九州や、奈良大和地方を中心に新しい文化が現われ、次第に西日本から東日本へ発展していった。その使用した土器は、はじめて発見された地名によって弥生式土器と呼ばれているのは衆知のとおりである。

弥生時代は、稲作、農耕、鉄器、青銅器の使用がなされるようになって、次に古墳が出現するまでの時期といわれ、紀元前三世紀から、紀元三世紀頃までとされている。

土器の紋様は簡単であるが、製法は進歩し、壺、鉢、高坏等均齊のとれた優美なものが多量に生産されている。そして、この時代の住居は平地や水辺に営まれ、数百に及ぶ竪穴住居の集団が発見されている。その遺物の類も土器をはじめ、石器製、木器製、金属製の生活用具、農具、式具等が極めて多種多様にわたっている。又、その生活はその遺物により、水田耕作をはじめたことがわかり、聚落は次第に低地を拡げて定着性を加えた農業が普及し、従って当地にもその村落集団が発生するようになったと推察されるのである。

以上が弥生式文化に対する概略の説明であるが、西方に発達した文化は、次第に東に東に展開して、前記した如くこの頃漸くこの小和田の地に先住者の姿を見出すことが出来るようになった

のであるが、天変変化を留めぬ砂丘地帯の特異性のために、当時防風林の対策としてなく、自然のままに身をまかせた先住者の労苦は、また一人のものがあつたであろう。

今に残る鶴巻の字名（今の小和田小学校南西付近）に、その昔、鶴の群舞する姿を想い、ここに田園調豊かな葦原なびく古き小和田の面影を想像するとき、鶴の群もさぞかし優雅な舞曲を演じたであろう自然の美観と、先住民族の営々孜々として農耕にいそしみ、自然を崇拜した様が脳

③ 上正寺の九重の層塔

鎌倉期のものと推察される供養塔（昭和26年撮影）



④ 上正寺山門（昭和26年撮影）



⑤ 六本松刑場跡（松林中学校南側、前方の松並木は東海道）（昭和27年撮影）

